

観血法により整復した黒毛和種牛の習慣性膣脱の1症例

下夕村幸薫，佐々木弘志

宮城県農業共済組合 中央家畜診療センター

要 約

24か月齢の黒毛和種未経産牛が妊娠中期より習慣性膣脱を発症した。膣脱は左側膣壁から片側性に認められたが、起立時に自然と還納される軽度の膣脱であったため経過観察していた。分娩後約2か月が経過しても症状は改善せず、用手による整復では再発が予想されたため、観血的な膣壁脂肪組織の摘出・除去による整復を実施した。尾椎硬膜外麻酔後に膣粘膜を1 cm程度切開し、鉗子を用いて膣壁内の脂肪組織を牽引し摘出した。術後の一般状態は良好で、再発はなく、臨床的な膣炎等の症状も認められなかった。また、手術から約2か月後の人工授精により受胎が確認された。本症例において、膣周囲への脂肪の蓄積に伴う膣圧の増加が膣脱の一因であったと考えられた。本術式は膣壁の損傷が認められない軽度の膣脱症例に対し、有効な治療法の一つとなると考えられる。

キーワード：観血法，脂肪組織，習慣性膣脱，未経産

牛の膣脱は膣壁の一部または全部が膨隆して陰門外に脱出した状態をいい、多くは妊娠末期のエストロジェン分泌の増加に伴う骨盤周囲靭帯の弛緩に起因するため¹⁾、妊娠後期から分娩後に発生する²⁾。特に分娩時期に関連せず、老齢化に伴う骨盤周囲靭帯の弛緩や脂肪の蓄積に伴う膣圧の増加により発症を繰り返すものは習慣性膣脱と呼ばれる¹⁾。一時的な膣脱は用手による脱出した膣の還納および陰門縫合等により整復されるが、習慣性膣脱は再発が認められる場合もあり³⁾、長期にわたると物理的な要因により膣組織を損傷し予後不良となる場合も少なくない。今回、分娩から約2か月が経過した黒毛和種牛の習慣性膣脱に対し、観血的な膣壁脂肪組織の摘出・除去による整復を実施し良好な成績を得たのでその概要を報告する。

症 例

症例は初診時24か月齢の黒毛和種未経産牛であり、体型は標準で過肥は認められなかった。妊娠中期以降、伏臥時に拳～人頭大の膣脱が左側膣壁から片側性に認められ診察依頼された。しかし、起立時に還納される軽度の膣脱であったため経過観察としていた。27か月齢で正常胎位の胎子を軽度の牽引により分娩した。分娩後約2か月が経過しても膣脱の症状は改善せず、初産牛であり今後も繁殖雌牛としての利用が期待されること、用手による整復では再発が予想されること、および膣組織に損傷や汚染が認められなかったことから、観血的な膣壁脂肪組織の摘出・除去による整復を実施した。

症例牛の取り扱い「宮城県農業共済組合における産業動物を用いた研究等に関する基本指針」に基づいて適切に行った（承認番号：第nm202003号）。

術式および経過

直腸検査にて宿便を取り除き、リドカイン塩酸塩80mg（キシロカイン注射液2%：アストラゼネカ）による尾椎硬膜外麻酔を実施した。外陰部の洗浄後、頸管鉗子で脱出部の膣壁を把持し（図1）、メスで膣粘膜を1cm程度切開し、鉗子を用いて膣壁内の脂肪組織を牽引し摘出した（図2）。出血はほとんど認められなかったため、吸収糸（シンセソープUSP規格5：川崎生物科学研究所）による切開部位の単純連続縫合を行い、生理食塩水による術創の洗浄後に還納した。手術当日と翌日にアンピシリンナトリウム（注射用ピクシリン：Meiji Seikaファルマ）3gを全身投与した。術後の一般状態は良好で再発はなく、臨床的な膣炎等の症状も認められなかった。また、手術から約2か月後の人工授精により受胎が確認された。



図1 術中の膣脱部位
脱出した膣壁を頸管鉗子にて把持している

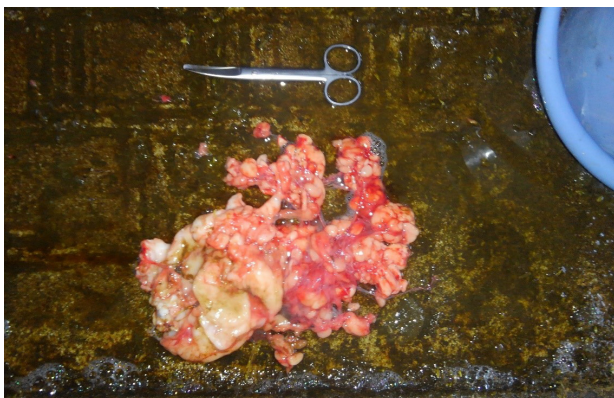


図2 摘出した脂肪組織

考 察

未経産牛は経産牛と比較して、老齢化に伴う骨盤周囲靭帯の弛緩の程度は少ない。本症例は膣壁脂肪組織の摘出により治癒したことから、脂肪の蓄積に伴う膣圧の増加が膣脱の一因であったと考えられる。しかし、ボディコンディションスコアは標準程度であり、過肥は認められなかったため、左側の膣壁周囲のみに脂肪が蓄積した要因を今後検討する必要がある。また、遺伝疾患等の先天的な要因も疑われるが、本症例に関連した血統において、同様な症状の報告は見当たらず、原因を明らかにすることはできなかった。

習慣性膣脱の中でも、膣壁が常時脱出し、乾燥・肥厚が進行し損傷が認められる症例や、絞扼が起こり脱出した膣が浮腫状に腫大している症例のような重症例に対しては、脱出した膣壁および脂肪組織を大きく切除し、膣壁を恥骨前縁部に固定する方法が報告されているが、出血が多く、熟練を要する術式である⁴⁾。一方、本術式は軽度の膣脱症例のみが適用となるが、切開創が小さいため出血も少なく比較的簡単である。適用症例や長期的な予後についての検討が今後の課題となるが、膣壁の損傷が認められない軽症例に対し、本術式は有効な治療法の一つになると考えられる。

引用文献

- 1) 小池壽男：膣脱，新編家畜外科学講義，第3版，363-364，養賢堂，東京（1998）
- 2) 中尾敏彦：膣脱，獣医繁殖学，第4版，388，文永堂出版，東京（2012）
- 3) Shino M：Modified Buhner's method for habitual vaginal prolapse of dairy cows, Jap J Animal Reprod, 19, 112-114（1973）
- 4) 宮沢正憲：乳牛の習慣性膣脱手術の研究，日獣会誌，15, 132-136（1962）